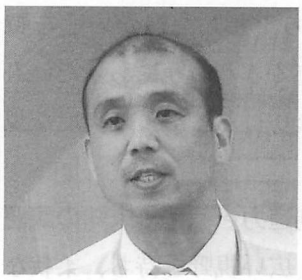
介護等体験実習に向けて

介護等体験実習を受講したみなさんへ

文学部人間関係学科
准教授　三　城　大　介



先日の朝日新聞に小学生が使う「ガイジ」という差別用語の記事が掲載されていました。

最近の小中学生が、障がい児のことを「ガイジ」と呼んでいる、あらたな差別用語として注意喚起が必要であるとの内容でした。高校生の息子に聞いたところ、彼が小学生の頃には既に、同年輩の児童が、校内の特殊学級の児童に対してそう呼んでいたそうです。

子どもの言葉は時としてあまりにも残酷に的確に事実を捉えることがあります。そして、区別は差別を招くことが往々にあります。

講義の中で、福祉パラダイムシフトとそれにともなう福祉レジームの再構築のお話をさせていただきました。日本を含めた福祉国家を標榜する国々では、福祉の対象者が社会的弱者から生活者のすべとなり、福祉サービスも社会的弱者に限定して向けられ、それらを収容して保護する収容保護の原則から、インクルージョン（社会的包摂）という原則の下、総ての地域生活者に向けられるものへ変化しました。

そして、ウェルフェアからワークフェアという言葉に象徴されるように、さまざまな状態の人が同じように地域社会の中でいきがいや目標、それぞれが担う社会的役割を持って生活することが当然のこととして捉えられるようになりました。

我々の生活が多様性に満ちていることが、ようやく当たり前のこととして私たちの中に認識されつつあります。しかしまだ、残念なことにそれは私たち生活者総ての中に根付くには至ってないようです。ラカンの言葉に「人は奇異なるものに恐怖を抱く」とあるように、私たちは自分と違うものを受け入れるのにとても戸惑いを感じる人がいます。インクルージョンの意義、つまり、誰もが同じ地域の中で多様性を内包しつつ生活することが当たり前といった認識が浸透するには、もう少し時間がかかりそうです。

またこれも、講義でもお話させていただきましたが、わたしの専門領域であるソーシャルワークを実践するソーシャルワーカーも教師も広い意味では、同じ対人援助職だと言えます。人（ある一定の括りを持った対象者、例えば生活に困窮している地域生活者、就学年齢に達した児童）に対して、必要な支援や指導、教育、家族間への介入、環境調整などを生業にしているという視点からみての話です。

私たち対人援助職が、地域社会の中で、多様性を認め実践する使徒となり、「ガイジ」という言葉がなぜ生まれ、その言葉が他者を区別する言葉となり、差別を生む危険性を孕んでいることを、私たちの対象者へ伝えてゆく必要があるでしょう。

同じ対人援助職者として、みなさんの存分のご活躍を期待しております。

教職への道

からだの教室　Laugh
別府大学　非常勤相談員　阿　部　京　子

教職課程を希望された学生の皆さんは様々な実習を無事終えられたことと思います。

ここ数年、「特別支援教育」という新しい障がい児教育の形について、実際に携わっている現場から、お話をさせていただいてます。

毎年、講義後にアンケートを取らせていただいてます。私のメールアドレスも記載し、個人的な相談や質問にも答えますよ、と明記しております。しかしながらこの数年で直接、質問を聞きに来る学生さん、なんとなく感想をメール下さる学生さんが減ってきてるなあ、という思いがあります。

直接意見を交わすことを苦手とする人々が台頭してきているのではないでしょうか。

ある程度、気心の知れた相手とであれば、楽しく時間を過ごすこともできるが、全く知らない相手とでは、初めから「拒否」、もしくは「それは義務ですか？」と尋ね、話題を探して「未知」の部分を楽しむ余裕さえない若者が多くあるような気がします。

個人的には、障がい児教育とは、普遍の教育の本質なのではないかと常々思っています。目に見える、または見えない障がいをもっている子どもたちに対して、何かを教え、彼らの力を引き出す教育という機会に接するにあたって、ちょっとした工夫や一風変わった視点を必要とする「特別支援教育」。本当はどの子どもにも必要な配慮であり、視点であり工夫なんです。障がいのない子だからといって放っておけば勝手に育つものでは決してないのです。

いつも、特別支援教育について、障がい児について、お話をさせていただく時にお願いすることですが、他の障がいのない子どもたちと同じように接してください、人間として当たり前に接してください、と言います。そうすると皆さんは一様に不安な顔をされます。「特別なこと」を聞きに来たのに、同じでいいとは何事かというような表情です。確かに戸惑われることと思います。けれど声高に、特別な支援を必要とする子どもには支援を、と言い続けると同時に、どの子にも同じような配慮を、と続けなければというこだわりを私は、抱え続けています。

特別支援は特別扱いではありません。どの子どもにも「努力してやり遂げた」という充実感を得られるような課題の設定が必要なんです。そしてそれはどの子も少しずつ、違うのです。どの子どもも努力し、実践し、達成し、見守ってくれた大人とその瞬間を分かち合う喜びを感じるというプロセスは同じなんです。早さや難易度や、努力の仕方すべてが、それぞれ違うだけなんです。

自分の力だけでやり遂げることが大事な時期の子、誰かに助けてもらって、手伝ってもらうってなんか嬉しいなって感じることが大事な時期の子ども、ゆっくり丁寧に仕上げることが課題の子、という風に。

今の子どもたちは、早いことや力が強いことだけに価値観を見出しがちです。多分大人社会がお手本なので、教育の現場だけで修正のきくことではありません。

それでも、感受性の豊かな子どもの時期に、いろんな努力の仕方があるんだよ、と教えてくれる大人と出会うことはとても大切なことだと思います。

いろんな価値観、多様な人間観を示すことのできる教職員になって、あなた方に関った子どもたちを、豊かな人間へと導いてください。

何よりも教職につくあなた方自身が人生を楽しみ、豊かに生きている実感を持たねば、何も教えられるものではありません。

あなた自身、何が好きですか？

何のためなら時間も忘れて取り組みますか？

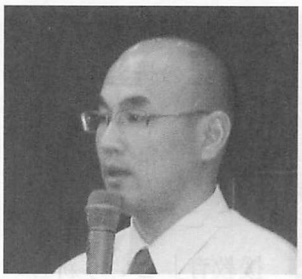
即答できる人生を送っていますか？

集団の中で、関り方に苦手さを持つ子どもたちと運動教室をしています。かれらと一緒にからだを動かして、人とのやりとりの心地よさを実感する体験をしてみませんか。

いつでも歓迎です。

「共にある」という存在

大分県社会福祉士会理事　Healing forest代表
別府大学　非常勤講師　明石二郎



「思い出・1」

遡ること、中学1年生のころ。人間関係や部活の先輩との関係において、思い悩んでいた私は、ひとりトボトボと自転車を押しながら人通りの少ない道を帰っていた。そこに、1台の車が通りかかり、私のそばで止まった。怖くて逃げ出そうかとも思ったが、親しみのあるその懐かしい笑顔から私の心もゆるんだ。その人は、小学5年生の時の担任の男性教師だった。快活で、笑顔がステキで、いつも私たちに明るさと元氣と勇氣を与えてくれていた。「おー！じろう。久しぶりやな、元氣か！」あの時と変わらない笑顔と快活な声かけだった。今の状況をたくさん、話したかったが・・・先生は、時間が無かった。その別れ際、「じろう。オレは、じろうの味方だからな。」。確信に満ちあふれた言い方と眼差しで伝えられた、一言だった。いつでも、僕にはこの先生がいると思えた。

「思い出・2」

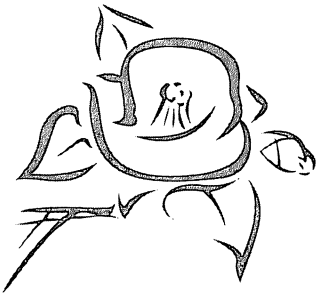
時は経ち、私は福祉従事者を経て高校の教師に成っていた。福祉を教え続けて5年。それも、人生の巡り合わせの中で最後の年と決めた。最後の年は、新入学の1年生の担任になった。この1年、私の持てるものは全て届けようと全力の日々だった。そして、何より教師として生徒たちとくるしみも喜びも「共にあろう」と、決めた。最後の日、サプライズでクラスの生徒が私の卒業式を開いてくれた。こんなに泣けるのかというほど、涙があ

ふれた。最後の言葉で、私は伝えることができた。「生まれてくれて、ありがとう。生き続けてくれて、ありがとう。僕は、どんなことがあっても、みんなの味方だよ。」あの時、先生がくれたように、確信をもって、力強く、そしてあの眼差しで伝えることができた。

「信じることのできる大人に出逢うこと」

あれから、私は一度も小学５年生の時の担任には、出逢っていない。それでも、あの時の言葉と眼差しは、今でも私に“力”を与えてくれている。それは、“人を信じる力”なのかもしれない。くるしみの中にある時、またはそのような状況でなくとも、こどもたちが信頼できる大人に出逢うこと。それは、今後、その子の人生を通した広がりを考えた時に大きな意味を持つように思う。なぜなら、その時に得ることができた“力”は、いずれ言葉と眼差しと共に広がり続けるのだから。

「共にあること」

あの時、私はほんの一瞬。先生が、私のくるしみを共に感じてくれたように思えた。そして、その少ない時間の中で、先生は教師として何ができるのかを最大限考え、全力で一言をしぼりだしてくれた。「オレは、じろうの味方だよ。」

教師は、教科指導、生徒指導、学級経営という専門的な技術を使う専門職である。しかし、技術は使う人によっても効果が変わることを知ってほしい。一人でも多くのこどもたちが、「共にある存在」として信頼できる大人がいることを信じていられるように。そして、その“力”を得たこどもたちが確信をもって伝え続けられるように。あなたの存在が、こどもたちに伝わる。